2020（令和 2）年 11 月 11 日
「「英語史コンテンツ展覧会」報告」
発表者：佐田 陸（東京外国語大学大学院博士後期課程）

去る 2020 年 10 月 31 日，英語史研究会主催の企画「英語史コンテンツ展覧会」が開催された．今年はコロナ禍の中にあって各学会で大会等が中止されている．英語史研究会においてもそれは例外ではなく，春に予定されていた大会が中止されたという．「英語史コンテンツ展覧会」はこれに代わる特別企画で，大会はできないものの，その間オンラインのツールを活用して，英語史を学ぶ者同士で英語史を楽しもうというコンセプトで行われたものである．「コンテンツ」と称されているのは，教材風コンテンツや語源エッセイ，英語に関する素朴な疑問への答えなどを綴った読み物であり，必ずしも学術的新奇性のある論文や研究ノートを意味しない．本企画には学部生から 66 件，大学院生から 15 件，計 81 件のコンテンツの出展があった．展覧会当日は，出展されたコンテンツを参加者同士で読み合い，ネット掲示板でコメントし合うという，学会とは全く異なる新感覚の形式で会が進められた．会の最後には，学部・院生それぞれの部門で，面白かったコンテンツへの投票が行われた．

本報告において，出展されたコンテンツより 3 本を選び，やや詳しく紹介を行った．1 本目は学部生部門から「Go Get 構文の使用における変異」というコンテンツを紹介した．Go Get 構文は一種の serial verb construction であり，go や come などに他の動詞の原形が続く構文である．従来は Go Get 構文において先行する動詞，後続する動詞ともに活用することが許されないとされてきたが，実態としては活用形が見られるという．どのような場合に活用が起こるのか，などの問のもと，出展者は研究を進めているそうだ．2 本目は院生部門から「私と英語とマッチングアプリ」というコンテンツを紹介した．コンテンツでは electric, gravity, attraction という 3 つの単語の意味の変遷を紐解きながら，英語史上，人が「引き合う」ということをどのように捉えてきたのかが示されていた．これらの語については，「引き合う」という姿から科学用語が生まれたり，逆に科学用語から「引き寄せる」という意味が生まれたり，あるいはまた，物理的に「引き合う」という意味の言葉に「人間同士が引き合う；人間を引きつける」という意味が与えられたりと，様々な形でその歴史を歩んできたという．3 本目は院生部門から「So について話しまソウ」とういコンテンツを紹介した．現代英語においては，原級比較の形に as ... as と (not) so ... as という形式が併存しているが，それはなぜなのか，という問題意識のもと，原級比較の歴史を示してくれた．原級比較の形式には古英語期・中英語期にわたっていくつかのバリエーションがあり，現代英語に至るまでに上記の二形式に落ち着いてきたのだという．言語は変化するものであり，一旦は落ち着いた原級比較のバリエーションも，この先再び変化するのかもしれないというメッセージを投げかけてくれた．